

§ 鹿島分場関係

イタヤガイの養殖試験 - I 天然採苗について

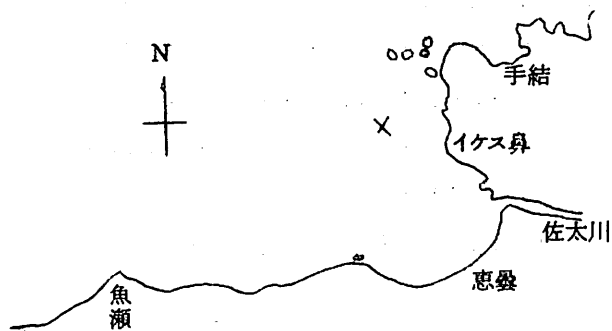
佐竹武元

イタヤガイは北海道以南の本邦各地、朝鮮半島、中国沿岸の水深10-80mの砂泥底に産し¹⁾、雌雄同体・卵生出生型に属する²⁾外海砂浜性二枚貝である。

島根県沿岸は、過去にこの貝が大発生したことで知られているが(1965年度の漁獲量、17690t)、近年、養殖ワカメやコウイカ籠などにこの種の稚貝が付着したことから、1976年の予備試験につづいて1977年3月-7月に付着層の明確化に重点をおいて本試験をおこない採苗されたイタヤガイ稚貝の数と大きさ、他生物などとの関係について検討したのでその結果の概要について報告する。

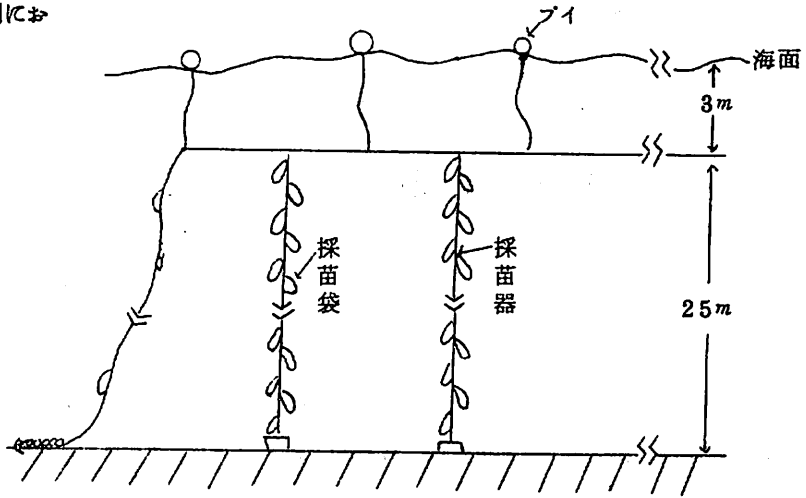
実験方法

採苗試験は、イタヤガイの出現期とみられた1977年3月12日、八束郡鹿島町恵曇の生州鼻地先(水深28m、砂泥底、第1図)に板間にすき間ができるようエンビ波板(30×60cm)2枚をたがえて重ね、玉ねき袋(網目3%)に収容し、袋口を閉じたものをロープ(ハイゼックス6mmφ)1m毎にとり付けた採苗器2連を第2図に示すように付設し、6月9日(3カ月後)および7月4日(約4カ月後)に1連ずつとり上げ、付着したイタヤガイ稚貝の計数と



第1図 採苗器施設場所

測定を層別にお
こなった。



第2図 採苗施設

結果および考察

詳細は水産増殖に投稿したので参照されたい。

要 約

1. 稚貝の層別平均付着数は、上層から海底に移るにしたがって大となった。また稚貝の殻長は層別には差はなかったが、4ヶ月後の場合では平均 20.2mm （最大 85mm ）に達し、中間育成に移行可能サイズとなった。このときの付着数は、底層（ $21-25\text{m}$ ）では平均 187 個、底部（ 26 —底）で 828 個であった。採苗適層は中層以深である。
2. 採苗器の取上げ適期は、稚貝の付着数と生長度の上から、7月上旬以後下旬までと思われた。
3. 島根県沿岸におけるイタヤガイの天然採苗は、今後くわしい調査が必要だが、その可能性のあることが実証された。
4. 幼生の付着に関する研究上の問題点が示唆された。

文 献

- 1) 生物学御研究所, 1971: 相模湾産貝類, 577, 丸善(東京)
- 2) 田中弥太郎, 1971: 雌雄同体・卵生型二枚貝での自家受精—イタヤガイ, 水産増殖 18(4), 209-210